**第46回社会思想史学会大会・自由論題事後報告**

**「韓国における丸山眞男論―丸山批判を中心に」**

**報告者：夫鍾閔（京都大学法学研究科）**

**司会者：武藤秀太郎（新潟大学）**

本報告は、 日本における丸山へのポストコロニアル批判を念頭に置きながら、かつて日本の植民地だった韓国ではどのような観点から丸山が批判されているのかを検討するものでる。特に、韓国において丸山眞男が論争を惹起する思想家として取り上げられる理由、丸山を批判的な韓国の研究者たちが採用する観点、そして、彼らが丸山の思想に見出そうとしている事柄を検討した。結論として、韓国の丸山批判も、日本における近代批判としての丸山批判と同様に、植民地問題を根拠として、丸山を批判している。しかし、だからといって、近代国民国家の政治的原理そのものを直接的に否定しているとは限らない、ということが韓国における丸山批判の特徴であった。

この報告に対し、丸山真男のいかなる著作が韓国語へと翻訳されているのか、特に考え方が変わったといわれる1970年代以降の丸山の著作がどのくらい翻訳され、議論されているのか、そして、日本の丸山真男批判との関連性の有無など、といった質問が寄せられた。

これに対し報告者は、丸山本人の著作や丸山論の翻訳状況とともに、韓国における古層論の評価などを説明した。特に、翻訳状況において、丸山の著作が翻訳されるのと同時期に、丸山の政治思想をポストコロニアルな観点から批判する日本の著作も翻訳されていたということを指摘し、日本の丸山批判が韓国の丸山論に影響を与えたことは確かだとしながらも、報告で説明したとおり、韓国の丸山批判全てがナショナリズムそのものを批判していない点で、日本のポストモダン的な丸山批判の議論とは少し文脈を異にしていると回答とした。そして、ナショナリズム批判へと進めなかった点から、韓国の丸山批判はポストコロニアルな観点すら徹底されていないと言えるかもしれないが（だから、既存の研究紹介は韓国の丸山批判が、丸山が単に日本人だから批判するに過ぎないとする）、ここにはナショナリズムをめぐる韓国のもう少し複雑な状況、すなわち、日本の文脈と違い、韓国のポストコロニアリズムがナショナリズムと親和的であるということも考慮すべきだと付言した 。